

『女子文壇』における女性の「書くこと」に関する研究

Research on woman's writing in the "Jyoshibundan"

森 美幸

Miyuki Mori

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：女子教育、女性雑誌、投稿

Key words : Girls' education, Women's magazines, Posts

1. 研究目的

本研究では女性投稿雑誌『女子文壇』内の「誌友倶楽部」欄における投稿することの意義について研究する。

『女子文壇』は一九〇五（明治三八）年から一九一三（大正二）年までの八年間に刊行された女子教育の隆盛と新聞・雑誌の投稿ブームの中で生まれた女性の投稿雑誌である。文壇が男性中心であった近代において、「投書は女子に限る」と明記した『女子文壇』は、この方針により大量の女性読者や投稿家を獲得した。

『女子文壇』では投稿欄と「誌友倶楽部」という誌友欄が特色として人気を博しており、女性達は誌上での交流と文通や物の交換等の交際を多く求めた。

本研究では『女子文壇』を対象に、女性たちがどのように「書くこと」で交流しコミュニティを形成したのかについて考察する。また、メディアからの発信に女性たちがどう反応していたのかについても考察する。

2. 研究実施内容

研究方法は、始めに近代の女子教育に関する先行研究を整理し近代女性の社会的立場を把握した。その上で『女子文壇』がどのような文学的立ち位置にあるかを確認した。

次に『女子文壇』内の誌友欄「誌友倶楽部」を精読した。具体的にはジャンルの発生や変遷を小見出しや記者と読者の交流から辿り、女性達が投稿することの意味や『女子文壇』に集まる理由に着目して論じた。

最後に「誌友倶楽部」欄の廃止や『女子文壇』

廃刊後の女性達がどこへ向かったのかについて、先行研究を基に考察した。また、『女子文壇』が果たした成果や、女性にとって書くことや誌上での通信はどのような意味があったのかを考察した。

結果、第一章では女子教育の需要の高まりで女子教育が発展していくことが分かった。女学校は「女学生」というイメージを作り上げた。雑誌は「女学生」の声を交信させる場として彼女達を引き寄せ、また学校教育を受けられない人にとっての「学校」として女性読者を獲得していった。これは『女子文壇』でも同様である。しかし、近代女性が受けられる教育は男子と比較して格差があり、また女性雑誌に関しても男性が特権を持っていた。他にも「誌友倶楽部」は文章の上達や稽古の場ではなく交流を楽しむ場所であると述べる先行研究が多く見られた。

第二章では、誌友倶楽部が交際や物の交換の場として、また記者に対しての要望などを伝える場所として適切であるとし、誌友の声が直接誌面に掲載される場所をメディア側から推奨・提供していた。記者の誠実な対応や地方においても他雑誌と比べて入手が可能であることが評価され、愛読者が増加していたことが読者の投稿から分かった。「誌友倶楽部」の投稿が増加するとジャンル分けが行われ小見出しが発生した。この小見出しの名称や欄内の位置は変動しており、号や年によってより細分化や逆に省略化も起きた。「誌友倶楽部」では、投稿は女性だけである筈の雑誌に女性に扮して投稿する男性や投稿欄で見つかった剽窃された文章の告発も行われていた。交際や交換でも女性の振りをする男性や「物品の只取り」の注意が相次ぎ、「誌友倶楽部」の隆盛と共に問題が浮上し

た。これらに対する記者の対応も曖昧なもので、やがて誌上のみでの交際や学校や地域間でのグループ活動が中心になるに連れて、「誌友倶楽部」の衰退が見られる様になった。その後も絶えず女性達の投書はあったものの、予告なしに突然「誌友倶楽部」は廃止した。

第三章では、「誌友倶楽部」と合併された「大波小波」と後継と思われる新しい欄の「群星」を読み、「誌友倶楽部」との違いを見た。

『女子文壇』が廃刊した理由が掲載された明確な文章は読み取れなかったが、『青鞥』を始めとした女性問題が議論を呼び雑誌への視線が厳しくなっていたことが一因であった。第九年には発売禁止処分が下されたこともあり、社会からの視線に答えて文学雑誌から婦人雑誌へと転化しようとした『女子文壇』は、読者の要求に応えきれていなかった。廃刊後、女性達は他の雑誌へ移った可能性が高く、一部の寄稿家へ上昇した投稿者らの中には編集に携わっていく女性もいた。女性達は「書くこと」でグループ化され新たな雑誌への投稿に繋がっていた。『女子文壇』がなくなっても、そこで得たものを基に、彼女達は別の雑誌メディアへと歩み続けたのである。

3. まとめと今後の課題

「誌友倶楽部」は沢山の女性読者の声が詰まっている。投稿者というのは厳密には採用された投稿であり、実際には計り知れないほどの便りが送られている。

彼女達は投稿や活字メディアに触れることも困難であったが、記者や他の読者と共に交流を深めながら「誌友倶楽部」を栄えさせた。やがて読者は「書くこと」で自分を表現することが可能になり、生活や社会にまで言及できる程に文章と思想を練ることが出来た。また、現実での交流は誌上での見えないコミュニティではなく現実のものとして彼女達をより結び付けた。その繋がりには『女子文壇』が終わっても別のメディアへの参入を可能にした。

本研究では「誌友倶楽部」の全てを追えた訳ではないため、今後の課題として更なる調査や考察をする方針である。

4. この助成による発表論文等

学会発表

[1]「森美幸」「『女子文壇』における投稿—「書くこと」をめぐる女性達の誌上通信—」
「令和6年度 修士論文発表会」「二〇二五年二月二二日」「大妻女子大学 (ZOOM 開催)」。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の令和六年度大学院研究助成 (B) (DB2430)「『女子文壇』における女性の「書くこと」に関する研究」を受けたものです